
マルチメディアと語学教育

鈴木 広子

このタイトルは、最近の英語教育関係の雑誌やシンポジウムのテーマに頻繁に使われている。ところが、「マルチメディア」が具体的に何を指すのかよくわからない。例えば、多摩地区の国立4大学が提携して単位互換制度を始めたという11月12日付の朝日新聞の記事の中では、「当面は学生が受講先の大学に出向くスタイルだが、将来は、各大学でマルチメディアを使ったテレビ授業をすることを検討している」という具合に出てくる。これでは、「マルチメディア」の意味が明確に理解できない。テレビは、情報の伝達媒体として、

映像、音声、文字の3種類が使われているので、「マルチメディア」であると言ってもよさそうだし、mediaという語自体が、テレビ、ラジオ、新聞などを指すことがある。そこで、現在、参加しているマルチメディア語学教材の開発プロジェクト（科研費試験研究B）を紹介して、私自身が「マルチメディア」をどのように捉えているか、また「マルチメディア」語学教育が、LL教室を含む設備、教授法をどのように変えるかを述べてみたい。

ここ数年、クローズド・キャプション（英語字

幕) 提示用のディコーダが教育現場で普及し、キャプション付き洋画やドキュメンタリービデオが、英語学習教材として活用されてきた。このような一般向けビデオを使って、学習者のレベルやニーズに応じた教材を試作することがプロジェクトの目的である。特徴の1つは、音声(英語)、文字(英語)、映像の3モードを自由に組み合わせ、映像のレッスンテンプレートを制作することである。市販のビデオを英語字幕付きで漫然と見せると、学習者は、情報処理能力を超えるので、理解過程で干渉をおこし、かえって混乱してしまう。しかし、処理能力に余裕がある場合は、複数モードからの情報が相乗効果となって、理解を深める。そこで、テキスト(文字)による語彙、内容理解の問題、音声を消して映像から登場人物の様子などを理解する映像コーディング問題、音声に集中するdictation問題などを補助演習としてあらかじめ与える。各モードの情報を十分に理解させた上で、文字+音声、映像+音声、映像+音声+文字など2種類あるいは3種類の複合モードの映像を視聴させる。このように、学習効果の高いシステムティックな教材設計を目指して、レッスンテンプレートを制作している。

2つめの特徴は、映画のおもしろさを最大限に引き出すことによって、学習者の動機付けを高める教材設計をすることである。これは、コミュニケーション教育の重要性が高まる中で、ディスカッション中心の授業を展開するにはどうしたらよいかという点から発想した。ディスカッションを成功させるためには、クラスサイズを小さくすること、そして、学習者がディスカッションの内容に関連した知識を得て、それを表現するための英語に慣れておくことが必要である。そこで、言語理解の部分を学習者が自学自習できるように設計し、教材内容をCD-ROM化することにした。CD-ROMの中には、内容理解テストとその正解、補足説明、語彙と文法事項の説明、和訳、文化を紹介する補足資料などを入れる。そして、学習者がゲーム感覚でインターアクティブに英語を学習するシステムにする予定である。自学自習システムを使うことによって、学習者は、言語と作品全体の内容を、自分のペースで正確に理解することができるので、

ディスカッション授業の準備として効果的である。また、クラスを2分して、自習組とディスカッション組の交代制で授業が行えれば、理想的な人数でディスカッションができる。さらに、ディスカッション授業では、作品の時代背景や登場人物について話し合う。ディスカッションを通じて映画のおもしろさを味わえる。このような形態にふさわしい内容のレッスンパターンを作成している。

以上述べてきたように、この教材設計は、学習者のレベルやニーズに応じて、映像、文字、音声の3モードを適切に組み合わせ提示する。また、学習者自身もモードの選択ができるシステムである。この点が、マルチメディアの特性を生かしていると考えるのである。

プロジェクトは、7大学の英語教員が、現状から離れて、未来志向の理想的な教材システムを開発してみようと始められたもので、実際に、このような教育システムが、すぐに導入できるわけではない。しかし、このプロジェクトの発想から、言語研究センターの教育部門をどのように改善していったらよいかを考え、センターに次のような要望をしたい。第一点は、映像のデジタル編集環境の整備である。語学教材が映像中心になってきて、複雑な編集を必要とするようになり、映像のデジタル化が必須である。現在スタジオにあるアナログ編集機能では、機器が老朽化したことを除いても、プロジェクトで制作しているような複雑な編集ができない。また、パソコンによるデジタル編集は、使い方がアナログ編集より優しいので、より多くの教員が気軽に編集できるようになる。第二点は、パソコンを導入した自学自習教室の充実である。情報処理センターのラボと同じようなイメージで、授業の一部として自学自習ができるような施設が望ましい。そのためには、学生が授業終了後に利用できるように、開館時間を延長または、遅い時間帯にシフトすること、CD-ROMドライブのあるパソコンを導入し、ビデオを含め機器の台数を増やすことが必要である。この2点は、実現可能な案だと思われるので、ぜひ考慮していただきたい。